

どこかで呼ぶような

小川未明

青空文庫

わたくしが門を出ると、ちようど、ピイピイ、笛をならしながら、らお屋が、あちらのかどをまがりました。

わたくしは、あの音を聞くと、なんとなく、春さきの感じがします。どこへ遊びにいくという、あてもなかったので、足のむくまま原っぱへきました。知らぬまにとなりのペスが、ついてきました。どうしたのか、きようは、だれのかげも見えませんでした。風のない、おだやかな空は、どんよりとうるんで、足もとの枯れ草は、ふかふかとして、日の光にあたたまっていました。その太陽のにおいをなつかしむように、わたくしは、ごろりとからだをなげだしました。ペスも、かたわらへ、前足をのばして、

うずくまりました。

しばらくすると、遠くの方から、オートバイの走ってくる音がしました。ペスは、はねおきて、往來のまん中へ出て、ほえたてました。

「ペス！ ペス！」と、わたくしは、よびかえそうとしました。

しかし、きかぬので、「ばかつ。」と、かけていって、わたくしは、犬を追いはらいました。

オート三輪車には、黒い眼鏡をかけた、おじさんが乗っていました。きゆうに、速力をゆるめると、

「どれ、すこし、休んでいこうか。」と、おじさんは、原っぱの中へ、車をひき入れました。

「ここは、あたたかで、いいところですね。」と、さもしたしげに、わたくしへ話しかけるので、わたくしも、いつしよに、もとの場所へきて、ふたたび草の上^{くさ うえ}にねころびました。ペスは、二人^{ふたり}のようすを見ると、きまりわるく思^{おも}ったか、家^{いえ}へ、さつさとにげていきました。

「きみのうちの犬^{いぬ}ですか。」と、おじさんが、聞^ききました。

「いえ、となりの犬^{いぬ}です。」と、わたくしは、答^{こた}えました。

「獵^{りょうけん}犬^{いぬ}らしいが、いい犬^{いぬ}ですね。」

「そう、よく、よそのにわとりや、うさぎをとつてこまるんですよ。」

「は、は、は。」と、おじさんは、わらいました。そして、ライ

ターで、たばこの火をつけました。

あおぐと、太陽は、黄色にもえていました。そのあたたかな光を、おしげもなく、草や人間の上にあびせています。このとき、またしても、ドーンという音がしたのです。

「おや、花火かな。」と、眼鏡をかけたおじさんは、耳をすましました。すると、ドーンドーンとつづいて、しずかな空気をやぶる音がしたのでした。それは、たしかに、あちらの森の、もつとさきからきこえたのでした。

「さつきから、するんですよ。」と、わたくしは、いいました。

「あつちの町ですね。いまごろお祭りかしらん。」と、おじさんは、考えていました。

わたくしは、神社のお祭りじんじやまつにしては、すこしはやすぎるよう
に感かんじたけれど、これから日ひに日ひに、その季節きせつにちかづくのを知
ると、なんとなく心こころがあかるくなりました。

「なにがあるか、いつてみませんか。そんなとおに遠くはないようだ
。」と、おじさんは、すぐにもでかけるようすをみせました。

「また、ここまで、つれてきてくれる？」と、わたくしは、帰かえり
を考かんがえたのです。

「どうせ、この道みちを通とおるのですもの、つれてきますとも。それに、
きょうの仕事しごとは、もうおわたのだから。」と、おじさんは、ち
よつとした探検たんけんにも、ひじょうな興味きょうみをもっているようだし
た。

わたくしも、同感どうかんでした。それに、おじさんを観察かんさつして、信用しんようしていいと思おもつたから、いわれるままに、三輪車りんしゃのあきばこへ乗のりました。石炭せきたんのかけらが、はこの四よすみに、ちらばっているのを見みると、たぶん、駅えきあたりから、工場こうじょうへ石炭せきたんをはこんだのでしよう。そう思おもうと、ふと、すぎ去さつた日ひのことが、思おもいだされました。

それは、一昨さくねん年の夏なつのことでした。わたくしは小ちいさい弟おとうとをつれて、つりにいったその帰かえりです。弟おとうとは、足あしがつかれたといつて、とうとう泣なきだしてしまいました。すると、そこを通とおりかけたオート三輪車りんしゃがあつて、わざわざ車くるまをとめ、石炭せきたんをはこんだあきばこの中なかへ、二人ふたりを入いれて、とちゆうまで、送おくつてくれました。

きつと、あのときから、この車は、この道をいつたりきたりして
いると思つたので、

「いつか、ぼく、これとおなじような三輪車に、弟と二人が、
乗せてもらったのですよ。おじさんは、あのわかい人を知らない
？」と、わたくしはきゆうになつかしくなつて、走りながら、車
の上で、聞きました。

「どんなようすをしていたい？」

おじさんは、運転しながらいいました。

「おじさんより、もっとわかい人なんだよ。」

「いつごろのこと？」

「おととしの夏休みだった。」と、わたくしは、答えました。

「ああ、それでは、知らない。たぶん、人がかわっているだろう。」

そうすれば、わたくしは、あの人にもうあえないのかと、さびしく思いました。

くるまとお車は遠くに見えた、あの森をいつのまにか、うしろにして、町

へ出たのでした。はじめて、あの花火は、こんど、新しく、町を

電車が、通ったので、その祝賀会がもよおされるためとわか

りました。ほかに、舞台がつくられて、女の子の手踊りなどあ

つてにぎやかでした。わたくしたちは、人だかりの間をわけてす

ぎると、東京音頭のレコードがなりはじめて、赤衣着物のひ

らひらするのが、目にはいりました。おじさんは、町にはいる時

ぶん
分ぶんから、かけていた、黒くろい眼鏡めがねを、はずしました。道みちの右みぎがわや、
ひだり
左ひだりがわを見みながら、車くるまは、しばらく、速そく力りよくをゆるくして、い
きました。

ある 停てい留りゅう場じょうのそばには、たくさんの露店ろてんがで出ていました。
なかには、まごいと、ひごいの生いきたのをたらいに入いれて、売うつ
ていました。どこから、こんな魚うおを持もつてくるのだらうと、わた
くしは、はやく川かわへいって、釣つりのできるころになればいいと思おも
っていました。

こんなことを思おもっているときでした。

あちらを、鈴木すずきくんが、おかあさんと歩あるいているのが、目めには
いりました。彼かれは、去きよ年ねんまで、おなじ学がっ校こうにいて、わたくし

と同級生どうきゆうせいだったのです。なんでも、彼かれのおとうさんは、まだ帰還きかんしないで、おかあさんと二人ふたりが、苦くるしい生活せいかつをしているとかで、彼かれは、学がっこう校がっこうへくるまえに、新聞しんぶんの配達はいたつをすますそうです。よく遅刻ちこくしても、先せんせい生せいはわけをよく知しっているので、だまつていました。運動場うんどうじょうの水たまりみずに、白しろい雲くものかげがうつる秋あきのころでした。彼かれの家いえがひっこすので、転校てんこうしなければならぬといつて、みんなに別れわかれをつげました。その後ご、わたくしは、ときどき、鈴木すずきくんのことを思おもいでしたが、いま、そのすがたをみ見るのです。彼かれは新あたらしいぼうしをかぶり、手てに、大おおきな買かい物もののつつみをかかえていました。そして、なんとなく、幸こう福ふくそうでした。

「きつと、おとうさんがぶじに帰られたのだろう。」

わたくしは、どうか、そうであつてくれればいいと思ひました。じき、彼のすがたは、人ごみの中にまぎれて、見えなくなりました。

「おじさんは、戦争へは、いかなかつたの。」と、わたくしは、聞きました。

「いかぬことがあるものか、六年近くもいって、やつと、このあいだ帰つてきたのさ。るすに家は焼け、親類にあずけておいた妹は、ゆくえがわからなくなつて、かわいそうだよ。」

おじさんの声は、かすれました。

「かわいそうだね、まだ小さかつたの。」

「でかけるとき、たしか十一ぐらいにしかならぬから、ぶじでいてくれれば、いま十七になるはずだ。だから、ずいぶん大きくなつて、ちよつとあつても、こちらではわかるまいが、おれのほうは、そうかわるまいから、妹いもうとが見つけければ、わかるにちがいない。」と、おじさんは、いいました。

ああ、それで、町まちへはいつたときに、おじさんは、かけていた、黒くろい眼鏡めがねをはずしたのだなど、わたくしは、思おもいました。そして、ほんとに妹いもうとの身をあんずる、兄あにの心持こころもちがわかるような気きがして、まぶたがあつくなりしました。

「どれ、おそくなるから、もう、もどるとしようね。」
おじさんはそういつて、車くるまをまた、きたときの道みちへとかえしま

した。

まだ、あちらへ露店ろてんがつづいて、いけば、にぎやかなところがあるような気がしました。そして、うす緑みどりいろ色の空そらの下した、どこか遠くとおの方ほうで、かなしい、ほそい声こえがして、わたくしたちをよぶようにもきこえました。

わたくしは、車くるまの走る道みちすがら、焼やけあとを見わたして、あのおそろしかった、空くう襲ゆうの夜よるを思おもいおこし、火ひの海うみの中なかを、うろついたのであろう、少しょう女じよのすがたを想そう像ぞうして、どうか、たつしやであつて、このやさしいにいと、早くはやめぐりあうようにと、心こころで祈いのつたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「幼年クラブ」

1949（昭和24）年5月

※表題は底本では、「どこかで呼ぶ《よ》ぶよな」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年12月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

どこかで呼ぶような

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>